

1ねん学年だよ!

平成30年5月9日(水) 第7号



いじめについて考える



5月7日(月)は《いじめについて考える日》でした。まず、全校集会でお話を聞いた後、各クラスでいじめについて考える内容の学活をおこないました。いじめに関するアンケートにも、家に帰って答えてもらいました。今後、アンケートに書かれた内容について、事実を聞き取ったり、注意や指導をおこなったり、先生たちも徹底的に立ち向かっていきます。では、いじめについての学習はこれで終わったのでしょうか? 答えはもちろん「ノー」です。いじめについての学習に“終わり”はありません。いじめは、自分の身の回りで「いつでも起こりうること」として、これからもずっと考え続けなければならない課題です。今回の学年だよりで、いじめについて考え続けます。



まずは脳の話から始めます。人間の脳は、大きく3つの層でできています。いちばん内側は《**脳幹**》という部分で、**呼吸をする**・**食べる**・**眠る**・**排泄をする**などの命令を出す層です。この部分がないと、人間は生きていくことができません。ヘビなどの“は虫類”にもあるので【ヘビの脳】とよばれます。2番目は《**旧皮質**》という部分で、**喜ぶ**・**怒る**・**悲しむ**などの命令を出す層です。この部分がないと、喜んだり、悲しんだり、といった感情活動ができなくなります。“哺乳類”全般にある脳なので【ネコの脳】とよばれます。3番目(いちばん外側)は《**新皮質**》という部分で、哺乳類の中でも人間だけにある部分です。つまり、**ものを考える**・**覚える**・**話す**などの命令を出す層です。人間だけにあることから【ヒトの脳】とよばれます。これらの【ヘビ・ネコ・ヒトの脳】とよばれる3つの層がうまく働くことで、私たちは元気に生きていくことができます。ところで、いじめは、これら《**脳の3つの層**》のうち、特にある部分を攻撃することがわかりました。どの部分かわかりますか? いじめの研究結果から、いじめは【ヘビの脳】を攻撃する行為であることが分かってきました。つまり、いじめは、その相手から**呼吸する**・**食べる**・**眠る**ことに対する意欲、もっといえば、「**生きる力**」・「**生きたいと思う意欲**」を奪うのです。いじめは、それほどひどい行為だといえるのです。



*



では、何がいじめで、何がいじめでないのか? これがまた難しい問題です。いじめた側はいつも「遊びのつもりだった」といい、また、同じことをされても「これは遊びです」と答える人がいるのも事実です。ただ、その“遊び”もどきが、いじめの発見を遅らせる要因となるのも事実です。



いじめについて考え続ける



いじめは、最初からいきなり“大きいじめ”から始まるのではなく、初めは“ちょっとした悪口”ぐらいのものから始まる場合がほとんどです。その時点では、まだ「いじめ」という感じではないため、いじめについて学習して、「いじめはいけないものだ」と本当に思っているのに、その一方では何人かで誰かの悪口を言っている、などということもありえます。それはすでに“**いじめの入り口**”にさしかかっているといえます。このような“**いじめの入り口**”は、日常生活のそこらじゅうにあります。怖いのは、【**ここが入り口です**】みたいな**看板はない**ということです。自分も相手も、気づいたところには“入り口”どころか、ずっと奥まで踏み込んでしまっています。たとえば、あまり好きでない人を、「ちょっとからかってやろう」とか、「腹の立つようなことを言ってやろう」などといった、ちょっとした「いじわる」も、立派な“**いじめの入り口**”です。



表の記事で【**何がいじめで、何がいじめでないのか？**】ということをお話しましたが、自分が考えるいじめと、他の誰かが考えるいじめは、必ずしも同じではありません。自分では「これは遊びだ」と思うことでも、相手は「いじめられた」と受け取るかもしれません。そう考えると、【**何がいじめで、何がいじめでないのか？**】という問いに、明確な答えはないのです。そのため、私たちは、自分の知らない間にいじめをしてしまうかもしれないということを自覚しなければなりません。それを自覚した上で、さらに、私たちには「**相手の気持ちを考える**」ことが求められます。「それを言われて(されて)相手はどう思うか」ということです。基本は「自分がされて嫌なことは相手にもしない」ですが、たとえ「自分にとっては平気なこと」であっても、相手は嫌がる可能性があるということをお忘れてはいけません。しかしながら、どれだけ相手の気持ちを考えていても、自分の言動が相手にいじめと受け取られる可能性は、やはり残っています。でも、「自分の知らない間にいじめをしてしまうかもしれない」という自覚があれば、自分が加害者になったときも、素直に認め、謝罪できるのではないのでしょうか。いじめは、私たち全員にとって身近な問題です。被害者になることも加害者になることも、どちらも身近なこととして考えておかねばなりません。

*



いじめについて考えることに終わりはありません。自分の中で「これはいじめにならないかな?」、「相手はどんな気持ちかな?」などと考え続けることが、いじめについて考えることになります。そして、自分は被害者にも加害者にもなりえる——、そのことをみんなで考え続けることが大切です。学年全員が幸せな学校生活を送るために、絶対に避けては通れない道です。



保護者のみなさまへ

いじめに関することは、保護者のみなさまにとってもたいへん心配されていることだと思います。学校でも、常に気をつけて生徒たちの様子を見てはいますが、すぐに教員に相談できる生徒ばかりではありません。ご家庭で気になることがありましたら、早めに学校(各担任)へご連絡をいただきたいと思います。学校とご家庭が連携をとりながら、学校生活を前に進めたいと考えています。